アウクスブルク市滞在記

（2026.08.29 - 09.07）

中川結光

・はじめに

　いよいよ始まってしまう……！見送ってくれる家族や職員の方々を振り返りながらそんなことを考えた。決してネガティブな気持ちだけでそう思ったわけではない。楽しみに思う気持ちははちきれんばかりだった。ただ、ほかの団員と違い私は海外渡航経験が、ヨーロッパはおろか近隣諸国にすらなく、飛行機にも若干の苦手意識があり、なおかつ英語コミュニケーションにも自信がなかった。それでもどうしてもドイツに行ってみたいという一心で応募したこの青年使節団であったが、結果としていままでの人生の中でも最も充実した１週間となった。

・到着、１日目

　飛行機を降りた時点でのミュンヘンの天気は雨だった。すぐに晴れてきたが早朝だったこともあり肌寒さを感じたことを覚えている。現地の職員さんたちが空港まで~~の~~迎えに来てくれて、大きな二階建てバスに乗せてもらった。バスの中で差し入れとしてもらった袋にはチョコレート菓子や水、そして青リンゴがまるまる一つ入っていた。あとで分かったことだが、ドイツでは小ぶりなリンゴを丸かじりすることがわりと定番のようだ。到着早々文化の違いに触れることができてワクワクした。バスの中からミュンヘンの街を眺めながらアウクスブルク市へと移動し、移動遊園地（プレラー）へと向かったが、車窓から見える街並みがまるでおとぎ話に出てくるかのような建物ばかりで、道中の移動だけでも胸が高鳴った。プレラーには露店、アトラクション、馬車、伝統衣装を着たスタッフさんなどがおり、盛り上がっていて楽しい空間だった。



（左）移動遊園地。馬車や伝統衣装を着たスタッフなど、クラシカルな雰囲気があり、にぎわっていた。

　その後は消防署へ赴き町を守る消防士の方たちと交流した。日本の消防署にも様々な種類の車両が用意されているが、アウクスブルク市の消防署が持つ車両はさらに種類が多く、「そんな役割まで？！」と驚くほど用途が多岐にわたっていた。地域のお助けマンのような存在として、細かい作業もこなせるのはこういった設備故なのだろう。

・２日目

ホストマザーとドイツ式朝食を食べてから集合場所に向かった。この日はまずヤンマーの山岡孫吉さんについて学んだり、長浜アレーと尼崎アレーを見に行ったりという使節団らしいプロジェクトから始まった。その後は植物園を見学に行って日本がどのようにしてアウクスブルク市で親しまれているのかについて考えた。洋風の植物園の中に静かに建っている日本式の門は何とも雰囲気があり、その先にはまるで本物のような庭園が広がっていた。庭園内には犬の散歩をしている老人や子供を連れたお母さんがいて、この庭園が市民の憩いの場となっていることに嬉しさを感じた。そのあとはフッゲライへと向かった。現役の福祉施設でありながら観光地としてにぎわっており面白い場所だった。そのまま市役所へと向かい、工事中の「黄金の間」を見学させてもらうことができた。見ることはできないと思っていたのでとても嬉しい体験だった。ルネサンス期に作られたというだけあって、豪華できらびやかな欧州風の内装で圧倒された。そのあとは市内を徒歩で散策したのだがみんな口をそろえて「どこを切り取っても絵になる」と言っていた。グランドホテルコスモポリスさんへの訪問では、「人々の生活のためにできること」について考えさせられた。



夕方ホストマザーにスーパーマーケットへ連れて行ってもらってドイツで人気なお菓子などを教えてもらったり夕飯のパンを買ったりした。

（左）フッゲライの写真。文化財でありながら低所得者が格安で住んでいる現役の福祉施設。

・３日目

朝は時間があったのでホストブラザーがおすすめのパン屋に連れて行ってくれた。ロココの間という豪華な広間で歓迎式を受け、記念品のトレーナーを贈られた。このときこのトレーナーを着てとった集合写真は我が家のリビングに大切に飾ってある。昼時はマーケットを散策し、日本ではあまり見ることができない賑やかな露店たちを見学することができた。市場から歩いてすぐの図書館も見学させてもらった。広くて近代的な建物で、入ってすぐに広がるオレンジ色の床と壁が印象的だった。子供向けの本のコーナーがかなり広く、子供向けのイベントも多く企画しているとのことで、市民に寄り添う図書館の様子がうかがえた。

昼食後は少し移動してディアンドル（伝統衣装）の体験をさせてもらった。時間の都合で上半身のみの試着だったが、団員みんなが写真撮影を楽しんでいた。ディアンドル

は時代のトレンドに合わせて形状やデザインが変化してきたらしく、その歴史についても学ぶことができた。そのまま歩いてプッペンキステの博物館に向かった。レトロな外装とは打って変わって近代的な仕掛けが施されている建物だった。操り人形というものについてあまり深く考えたことはなかったのだが、舞台裏の設備を見せてもらったときに非常に細かい場ミリや背景を動かすためのレールなど興味深いものをたくさん発見した。夜には日独協会の方々と伝統料理シュペッツレを一緒に調理した。日独協会の方々は簡単な日本語で、私は覚えたてのドイツ語で会話をすることによってむしろ心を通わせることができたように思う。

・４日目

ロマンチック街道を南に下ってフュッセンのほうへ向かいノイシュヴァンシュタイン城を目指した。ロマンチック街道は「ローマへ至る道」という由来があるのだそうだ。進むにつれてだんだんと景色が変わりはじめ、建物の数が少なくなりごつごつした山が見えてきた。そしてたくさんの牛や馬がのびのびと飼われていた。お城のすぐ近くのアスレチックで自由時間をもらいみんなで森の中の滑り台を滑ったりつり橋を渡ったりした。なかでも驚いたのは森を抜けた先に流れていた青いレヒ川の美しさだった。とてもきれいに澄み切った青色で、腕を浸すとかなりひんやりしていた。これほど綺麗な川は見たことがない。みんなではしゃぎながら石切りをしたのはいい思い出である。そしてついに待ちに待ったノイシュヴァンシュタインの見学だ。世界史の教科書で見て以来どうしても行きたいと思っていたのである。あこがれのお城を目の当たりにして私は大興奮だった。中に入ってみると様々な様式を取り入れた部屋があり、派手な壁画も多く描かれていた。騎士道物語にあこがれていたというルートヴィヒ２世のこだわりが細部にまで行き届いており興味深かった。その後訪れたヴィ―ス大聖堂教会では豪華な絵画や彫刻に圧倒された。一日の間に世界遺産を２つもめぐることができて大満足な一日だった。




（左）マリエン橋から見たノイシュヴァンシュタイン城。天気にも恵まれ絶景だった。
（右）ヴィ―ス教会。写真からでもその豪華さがわかる。

・５日目

地元のサッカースタジアムの見学に出かけた。ドイツではサッカーが国民的人気スポーツなだけあって、至るところに地元のサッカーチームがあるのだそう。実際にフィールドに降りさせてもらう機会があったが、選手が入場するときと同じ音楽をかけてもらった。そのあとはバスでダッハウへ向かい強制収容所の見学を行った。当時のまま残されている部分は限られていたものの、写真や服などが展示されており重々しい雰囲気が漂っていた。私が個人的に一番恐怖心を抱いたのはガス室の展示だった。分厚い壁に囲われた真っ暗な部屋で何とも言えない恐ろしい雰囲気があった。戦争のむごさを見せつけられ少し気が沈んでいたのだが、なんと、そのあとすぐお昼ご飯だった。この日食べたのはシュニッツェルだ。とんかつに似た料理で、日本人にとっても食べやすい料理だと思う。その後はまたバスでミュンヘンまで行き BMW 博物館とレジデンツ宮殿でのコンサートを楽しんだ。





（左）ダッハウ強制収容所の火葬場。中にはガス室も作られている。
（右）モーツァルトも過去に演奏したとされる教会。レジデンツ宮殿の中にある。

・６日目

アウクスブルク市は水管理システムが世界遺産として登録されている面白い街なのだが、この日はそんな水管理に欠かせなかったという古い塔の見学に行った。川から引いた水を高いところへ押し上げてから一気に落とすことで水圧を利用して水を高いエリアの街に送っていたのだそう。職業訓練場の見学にも訪れたが、学生の方々が楽しそうに実習に参加している環境を見て、この施設がいかに生徒のことを考えて運営されているのかを感じることができた。

フェアウェルパーティーの出し物は大盛況だった。クイズの景品はとても反響が良かったし、福笑いや名札のプレゼントもとても楽しんでもらえた。しかしいよいよお別れが近づいてきたことを実感し、少し切なくなった。

・７日目

　この日はホストファミリーと自由に過ごす日だったので、まずはホストファザーに近くのお土産屋さんやスーパーに連れていってもらった。ドイツのスーパーは乳製品や肉コーナーが非常に充実している。買い物が終わった後は高速道路を１時間半ほど走って南の方へ向かいヘルツォークシュタントという山でロープウェイに乗り登山をした。この山は２つの小さな湖に挟まれている。絶景を見たいという私のリクエストを聞いてホストファザーが連れてきてくれたのだ。この日はあいにくの天気だったが、一瞬雲の合間に見えた湖と隣国の山々は壮大で美しかった。アウトドアになじみが全くない私には登山はきつかったが、頂上でピクニックをしたことは大切な思い出になった。夕方はアウクスブルク市郊外まで戻り、ホストマザーが準備しておいてくれたBBQに参加した。





（左）山頂から見た景色。眼下にはヴァルヒェン湖、奥にはオーストリアの山が見える。この景色を見ながらピクニックをし、リンゴやパンを食べた

（右）カイザーシュマーレンというお菓子。バラバラにしたパンケーキという意味らしい。登山後にホストファザーと山小屋で食べた。

・最後に

　ホストファミリーとの別れは本当に寂しいものだった。涙を流しながらハグをしている団員ばかりだった。もちろん私もそうだ。感謝をつづった手紙を渡し、必ずまたアウクスブルクへ来ることを約束した。温かい人がたくさんいて、食べ物がおいしく、街並みも美しいこの街を、自分でも気づかないうちにとても大切に思うようになっていたらしい。ドイツ語の勉強を頑張って、いつかもう一度訪れようと思う。本当に素晴らしい経験をすることができた。充実した１週間だった。もう使節団員としてドイツを訪れることはないが、ここで経験したおもてなしや感動を糧に来年以降の使節団交流に貢献していけたらと思う。